早稲田大学大学院日本語教育研究科

# 修士論文概要書

## 論文題目

# 非母語話者日本語教師による音声教育に関する考察

## －ベトナム人教師の韻律指導の実践を通して－

サイ ティ マイ

2016 年 03 月

本論文は第一章序論、第二章先行研究、第三章研究方法、第四章分析結果、第五章総合的考察、第六章結論と今後の課題といった全 6 章から成り立つ。以下、第一章から第六章の順に要約する。

## 第一章　序論

第一章では、本研究を行うに至った背景、問題意識、研究目的、本研究の構成について述べる。

本研究の目的は、日本語を母語としないベトナム人教師 2 名の韻律指導の実践の参与観察とインタビュー調査のデータ分析をもとにベトナム人教師の韻律指導における困難点、工夫を明らかにし、ベトナム人教師への支援について考察することである。

筆者は、学生時代に外国語の発音だけでなく母語の発音に問題があったため、発音の重要性及び音声指導の重要性を強く感じている。日本語教師になってからも、ベトナム人学習者の音声指導及び音声指導における日本人教師とベトナム人教師の役割分担に悩んだ。音声指導は、母語話者教師に任せきるのではなく、筆者のような非母語話者教師に何できるか問い続けてきた。さらに、近年、ベトナム国内の日本語学習者の増加だけでなく、日本に留学して日本語を学習しているベトナム人も急増している。ベトナム人日本語学習者の急増により、ベトナム人の日本語学習における様々な問題が浮かび上がっている。その中で、ベトナム人日本語学習者の発音は単音レベルから韻律レベルまで指摘されている（重川・中村 2005、金村 1999、杉本 2003）。特に松田（2012）は日本語上級レベルの中国語、タイ語、韓国語、ベトナム語の母語話者の中でベトナム人の学習者の発音は自然さも印象も最下位であると述べている。よって、日本留学中のベトナム人日本語学習者のみならず、ベトナム国内の学習者にも音声指導を行う必要があると思われる。それゆえに、本研究は、ベトナム国内の音声指導の実践に焦点を当てることにした。

本研究の目的を明らかにするために、以下の三つのリサーチクエスチョン（以下、RQ）を設定した。

RQ1: ベトナム人教師の韻律指導における困難点は、何か。

RQ2: ベトナム人教師は、韻律指導を行う際にどんな工夫をしたか。

RQ3: ベトナム人教師の韻律指導を支援するために、何が必要か。

## 第二章　先行研究

第二章では、複数の観点から諸先賢による先行研究を整理し、記述した。それを踏まえ、本研究の位置付けと用語の定義について述べた。

戸田（2008）では、日本語学習者の中には日本語の発音の正確さと自然さを求める人が多く、音声教育に対する学習者のニーズが高いということが明らかになっている。それにも関わらず、日本語教育の現場では、音声教育が十分に行われていない（谷口 1991、戸田 2008、小河原・河野 2009、轟木・山下 2009）。一方、近年、音声教育における指導法とその有効性に関して、様々な研究がなされている（松崎 1995、崔・吉田 2007、山下 2008、中川・中村 2010）。今後、日本語教育における音声の指導法だけでなく、音声指導の実践も益々増えるだろう。

日本国内における音声教育の実践に関する研究は、多数であるが、海外における音声教育の実践に着目する研究は極めて少ない。また、海外の日本語教育機関では、音声指導は母語話者教師に任せ切ることが多い。しかし、海外における日本語母語話者教師は、少数であるため、音声指導の役割をすべて担うことが不可能であろう。それゆえに今後の音声教育においても非母語話者教師の利点を活かすべきだと考えられる。

ベトナム国内の日本語教育において、中村（2013）は、ベトナムの日本語教育において90％以上のベトナム人教師と半数の日本人教師は、音声教育の重要性を認識していること述べている。しかし、音声教育が体系的に行わるのではなく、ベトナム人教師と日本人教師が学習者の発音問題を感じ、時々音声指導を行う（中村 2013:116）。また、ベトナム人学習者を対象に行われた実践は、あるが、これらの研究は、日本人教師が日本に留学しているベトナム人学習者を対象に音声指導の実践を行ったものである。そのため、現地の教師が現地の学習者を対象に音声指導を行う必要性が感じられる。

以上、日本語音声教育の現状、日本語音声教育における実践研究、そしてベトナムにおける音声教育の現状について記述した。本研究は、非母語話者であるベトナム人教師とベトナム人学習者に着目し、今までの研究とは異なる視点から韻律指導の実践を分析する。また、ベトナム人日本語学習者が急増しており、発音上の問題がたくさん指摘されている状況の中で、本研究で見られたベトナム人教師の韻律指導における困難点、工夫は、ベトナム人教師のみならずベトナム人学習者を対象とした日本人教師の音声指導の実践にも役に立つと考えられる。さらに、今後の音声教育においてベトナム人教師への支援につて

様々な可能性を検討することができると考えられる。

## 第三章　研究方法

本研究の目的を明らかにするために、以下のベトナム人教師 2 名に韻律指導の実践を行ってもらい、参与観察及び半構造化インタビューといった 2 種類の調査方法を採用した。

表 3-2 調査協力者の属性

| 属性 | 教師 A | 教師 B |
|---|---|---|
| 年齢・性別 | 30 代の女性 | 20 代の女性 |
| 学位 | 修士号 | 学士 |
| 日本語教育の経験 | 7 年 | 4 年 |
| 日本留学の経験 | 4 年 | 1 年 |
| 日本滞在の年数 | 6 年 | 1 年 |
| 日本語音声学の知識の有無 | 有り | 無し |
| 音声指導の経験 | 無し | 無し |

韻律指導の内容は、戸田（2004）『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク 第 5 課「名詞のアクセント」と第 9 課「イントネーション」の 2 課であった。調査協力者 2 名に週に一課ずつ約 1 時間程度計 2 回×60 分/回で実践してもらった。

実践の対象者は日本語の韻律指導を受けたことがないベトナム人初級日本語学習者であった。調査者は、参与観察の立場として実践に参加し、実践の様子をフィールドノーツに記録した。韻律指導の実践終了後、調査者は対面で調査協力者 1 名ずつに 1 時間程度の半構造化インタビュー調査を実施した。韻律指導の実践及びインタビュー調査を行った際に、録音と録画を行った。実践後、その録音と録画のデータをすべて文字に起こし、分析を行った。

## 第四章　分析結果

第四章では、調査協力者 2 名の韻律指導の実践の参与観察とインタビュー調査の結果を述べる。

教室の環境、実践の流れ、教室の活動、受講生の反応といった外的な要素を考慮したう上で、ベトナム人教師 2 名の韻律指導における困難点、工夫、彼らへの支援について教師 A と教師 B のそれぞれの分析結果について詳しく記述する。

教師Aの場合、受講生の理解を重要視し、声に出す練習より解釈・説明に焦点を当てる傾向が見られた。実践中に主に受講生に今までの自分の発音を振り返ってもらい、アクセントとイントネーションの違いに気づかせる活動が多かった。全体的に意味、ニュアンスの説明と確認の時間が多かった。また、ペア・グループ活動より個人活動が多かった。参与観察とインタビューの分析では、韻律指導における教師Aの困難点は4つ見られた。それは、①自分自身の発音の不安 ②日本語韻律の知識の不足、③韻律指導方法の知識の不足④教材の不足である。しかし、①モデル音声の活用、②ベトナム語音声知識の活用、③日本語教師の経験の活用、④教師用指導書の活用といった 4 つの工夫をしたことで韻律指導の実践を行うことができた。

教師Bの場合、受講生が言葉の意味、文のニュアンスを理解した上で正しい発音をしてもらうことを重要視し、発音練習に焦点を当てる傾向が見られた。よって、実践中に声に出し、受講生同士で発音の練習をして、アクセントとイントネーションの違いに気づかせる活動が多かった。参与観察とインタビューの分析では、韻律指導における教師 B の困難点は5つ見られた。教師 A と同じ 4 つの困難点の他に、もう一つの困難点は、韻律指導における時間と受講生の人数の制約である。それらの 5 つの困難点を乗り越えるために、教師Bは、教師Aと同じ4つの工夫の他に、指導の範囲、受講生の日本語レベルに配慮し、楽しい韻律指導を行うことができた。

また、教師Aと教師Bのインタビュー調査の結果から、今後の韻律指導において期待されるベトナム人教師への支援は、①韻律指導における教師間の協同、②ベトナム人教師の研修、③音声リソースの開発と活性化といった3点である。

## 第五章　総合的考察

第五章では、第四章の分析結果を踏まえ、ベトナム人教師の韻律指導における影響要素を論じ、以下の4点で総合的な考察を述べた。

(1) 韻律指導における音声知識の影響

非母語話者教師が韻律の指導ができるようになるためには、専門的な音声知識ではなく、「応用的な知識」が必要である。日本語教育において、非母語話者教師のみならず母語話者教師と学習者と「応用的な知識」を共有できれば、韻律指導を一歩前に進めることができるだろう。

(2) 韻律指導における日本語教育の経験の影響

実践の観察及びインタビューの分析結果では、日本語教育の経験は韻律指導の可能性

に影響を及ぼすことが見られなかった。いわゆる日本語教育の経験が長いからといって、韻律指導ができるとは限らない。反対に、日本語教育の経験が短いからといって、韻律指導ができないとは言えないだろう。

(3) 韻律指導における日本留学の経験と日本滞在年数の影響

調査協力者 2 名の中で、教師 A は日本留学の経験が 3 年、日本滞在の年数が 6 年であるに対し、教師 B は日本留学の経験と日本滞在の年数がたった 1 年である。しかし、実践の参与観察とインタビューの結果では、教師 A より教師 B の方が自信をもって、韻律指導ができたことが明らかになった。つまり、日本留学の経験と日本滞在の年数は韻律指導に影響を及ぼさないと言ってもいいだろう。

(4) 韻律指導における学習者としての発音学習と発音練習の経験の影響

教師 A と教師 B の韻律指導におけるもっとも大きな違いは、教師自身の発音に対する自信だと思われる。その発音の自信は、教師自身の学習者としての発音学習と発音練習の経験による差が表れたのだと考えられる。

## 第六章　結論と今後の課題

第六章では、本研究の結論、日本語教育への示唆及び今後の課題について述べる。

韻律指導の実践の参与観察及びインタビュー調査の分析結果を踏まえた上で、本研究から以下の点が明らかになった。

(1) **ベトナム人教師の韻律指導における困難点については、**①ベトナム人教師自身の発音に対する不安 ②日本語韻律における知識の不足 ③韻律指導方法の知識の不足 ④韻律指導に関する教材の不足 ⑤韻律指導における時間と受講生の人数の制約といった 5 点が見られた。

(2) **ベトナム人教師の韻律指導における工夫については、**①モデル音声の活用 ②ベトナム語音声知識の活用 ③日本語教師の経験の活用 ④教師用指導書の活用⑤指導の範囲と受講生の日本語レベルへの配慮といった 5 点が見られた。

(3) **韻律指導におけるベトナム人教師への支援については、①**韻律指導における教師間の連携 ②韻律指導におけるベトナム人教師の研修 ③韻律指導におけるリソースの開発と活性化といった 3 点が考えられた。

また、本研究の結果から①非母語話者教師による音声指導の重要性 ②音声指導におけるティーム・ティーチングの重要性 ③音声指導における非母語話者教師の基準設定の重要性といった 3 点を日本語教育に示唆できた。

最後に本研究における今後の課題として、①ベトナム人教師の音声指導に関する追跡調査であると②ベトナム人教師の韻律指導を受けた学習者に関する追跡調査の 2 点を挙げた。

**主な参考文献**


金村久美子（1999）「ベトナム語話者による日本語の発音の音調上の特徴」『ことばの科学』12 号、名古屋大学言語文化研究会、pp.73-92

崔春福・吉田光演（2007）「中国語母語話者を対象とした日本語の複合語アクセントの指導法－VT 法の指導効果をめぐって－」『欧米文化研究』第 14 号、pp.71-83

杉本妙子（2003）「ベトナム語圏日本語学習者の発音に関わる誤用について I－誤用の実態を中心に－」、『茨城大学人文学部紀要コミュニケーション学科論集』、14 号、pp.19-45

谷口聡人（1991）「音声教育の現状と問題点―アンケート調査の結果について―」『日本語音声の韻律的特徴と日本語教育 シンポジウム報告』、凡人社、pp.20-25

戸田貴子（2004）『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク

――――（2008）『日本語教育と音声』くろしお出版

轟木靖子・山下直子（2009）「日本語学習者に対する音声教育についての考え方 - 教師への質問紙調査より－」『香川大学教育実践総合研究』18、pp.45-51

中川千恵子・中村則子（2010）「視覚的補助による韻律指導法の紹介と提案」『日本学刊』第 13 号、pp.5-15

中村則子（2013）「非母語話者教師と母語話者教師の発音指導－ベトナムにおけるアンケート調査の結果から－」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』39、pp.113-124

松崎寛（1995）「日本語音声教育におけるプロソディ―の表示法とその学習効果」『東北大学日本語学科論集』第 5 号、pp.85-96

松田真希子（2012）「ベトナム語母語話者のための日本語教育に関する総合的研究」一橋大学大学院言語社会研究科博士後期論文未公刊

山下好孝（2008）「リズム単位を利用した発音指導：後ろ向きフィットカウントの試み」『北海道大学留学センター紀要』11、pp.76-89